

これからの美術教育は、どうあるべきか

1 美術科の性格を踏まえた指導理念を確立させる。

これまでの美術教育は、自由な美術活動と美術教育とが混同されてきたと言われている。

今回の改訂により、その混同が正され、学校教育としての美術科の確かな実践の方向性が明示された。

意図的、計画的教育

2 美術で育てる基礎・基本とは？

(1) 人間の成長・発達による表現の変容

幼児期

(1～5歳)

受動的表出

自分の感情や興味の赴くままに行うエモーションな表出

児童期

(6～11歳)

意図をもって自分を表す方法の体験的獲得

表現の基礎的方法を体験的に獲得していく。

思春期

(12～15歳)

外界に働きかけることによる自己確認

意図を的確に表す基礎的方法の獲得

外の世界の価値を取り込み、自己の価値付けを補強していく

人間・自然・文化

青年前期

(16～18歳)

自己の内面を深く見つめ、
自己存在や文化の意味を追求

自己存在の真の意味を獲得しようとする模索期
芸術の意識、芸術世界への憧れ

青年後期

(19～25歳)

自己にとっての価値(意味)の追求
自己の価値世界の創造

社会的存在としての自己の意味の認識、自己価値の創造
芸術の追求・創造

(2) 生涯学習としての学校美術教育のなすべきこと

生涯学習・・・ 各個人が、それぞれのライフステージにおいて、自由意志に基づき学習する内容を自由に選択して行う学習活動

学校美術教育の基本的な構え

- ア 生涯にわたり、学んでいこうとする意欲とそのための基礎的能力を育てる。
- イ 自由活動や社会教育の場でできることと学校教育であることを混同しない。

(3) 学校美術教育で最低限身に付けさせるべき基礎・基本の内容

表現にかかわる基礎・基本

- ア ものの見方・感じ方を深めること（観る力、感じ取る感性）
- イ 主題や発想を創出すること（発想力，イメージを浮かべる力）
- ウ 考えやイメージをまとめ組み立てること（構想力，構成力）
- エ 形，色，材料，で表す感覚や基礎的技能を身に付けること
- オ 創意工夫して，よりよく表すこと（まとめ上げの力）
- カ 全過程を通して自己確認すること（自己確認の態度）
- キ 作品を通してコミュニケーションや批評をし合い，互いのよさや個性などを理解し合うこと
- ク 自分の作品に愛着をもち，大切にすること

鑑賞にかかわる基礎・基本

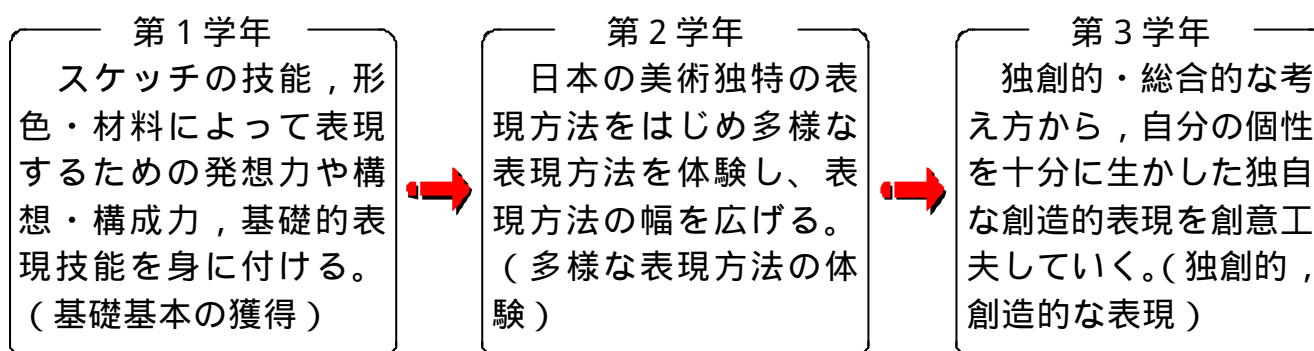
- ア 鑑賞の能力面の基礎・基本
 - (ア) 作品の見方や感じ方
 - (イ) よさや美しさ，作者の心情などを感じ取る力
 - (ウ) 美意識や美的判断力
- イ 内容面からの基礎基本
 - (ア) 美術作品などの表現の意図や方法の理解
 - (イ) 文化遺産や文化財などの特質の理解
 - (ウ) 日本の美術の変遷と作品などの理解
 - (エ) 美術と人間とのかかわりの理解

学習指導要領「美術」における基礎・基本と創造的能力の発展的位置づけ

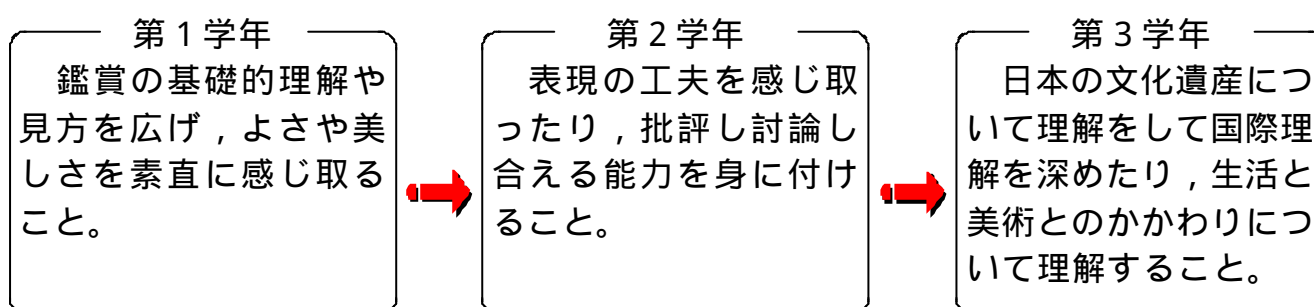
美術教育の一貫性とは
小学校・中学校・高等学校を通じた美術教育の一貫性とは、「形・色・材料」によって表現，鑑賞すること。すなわち，「形・色・材料」によって行う学習のことである。

内容や方法が，学年の発達によって発展的に異なってくる。

「A表現」の重点と系統性



「B鑑賞」の重点と系統性



- 3 感性を豊かにし，豊かな情操を一層養うこと
- 4 鑑賞の指導の充実を図ること
- 5 個に応じた多様な表現方法の選択幅を広げること
- 6 生徒が楽しく主体的に学ぶ美術へ変容すること
- 7 個性に応じて学習を高められる選択教科「美術」の授業を開発すること